

音戸瀬戸平清盛開削伝説に関する学際的研究とその地域教材化

研究代表者 広島大学大学院教育学研究科 下向井龍彦 ほか 5 名

1, 研究の目的

平清盛が音戸瀬戸を開削したという伝説はあまりに有名であるが、それが事実であったかどうか、また伝説がどのように形成され浸透していったのかについては、これまで本格的な研究はほとんどなされてこなかった。また地域社会が急激に変貌する今日、地域文化としての清盛伝説が呉市民にどのように認識されているのかも明らかではない。

本研究の目的は第一に、歴史学、歴史地理学、民俗学、自然地理学、地質学など、いろいろな学問分野の研究手法をつかって、平清盛が音戸瀬戸を開削したというのが事実かどうか、すなわち音戸瀬戸がもともと海峡だったのか、平安末期に切り離されて海峡になったのか、について検証することであった。

第二に、清盛開削伝説がどのように形成され、広まっていったのかについて、歴史学・民俗学の手法によって明らかにすることであった。地域の人々にとっても、地元の誇りであるこの伝説がどのように生み出され広がっていったのか再発見していくことは、地域意識・歴史意識を深めていく上で意義あることである。

第三に、以上の研究成果をふまえ、小中学校での地域学習、地域社会での生涯学習のための教材開発を行うことであり、その前提作業として、地元音戸地区・警固屋地区を中心に各地域でアンケート調査を行い、この伝説が現在どの程度人々に知られているか実態調査を試みた。

2, 研究の内容と結果

1) 清盛開削説の真偽の検証

歴史学・歴史地理学・民俗学からの検討 清盛以前、音戸瀬戸はすでに瀬戸内海航路の主要航路であり、清盛が開削して海峡化したのではなかったことを明らかにした。第1に、『日本書紀』(720年)神武東征コース、『本朝無題詩』の僧運禅の上洛コース(12世紀前半)、治承4年(1180)『高倉院厳島御幸記』の厳島参詣コースから想定される瀬戸内西部の古代航路は、山陽道側陸地沿いに島嶼部との狭い海峡(大島瀬戸・大野瀬戸・呉湾・音戸瀬戸)を、潮汐差がつくるはやい潮流を利用して航行する地乗り航路であった。第2に『万葉集』で歌われる「長門島」が倉橋島なら、音戸瀬戸は奈良時代すでに海峡だったことになる。第3に、音戸町西半の「渡子」の地名は、7世紀後半～9世紀にかけて、交通の要衝にあたる河川・海峡に置かれた公設渡船の「渡し守」を指す法律用語に由来し、音戸瀬戸が瀬戸内海航路の要衝であったこと、奈良時代に公設渡船が設置されていたことを示す。第4に、ナベ・カラス小島・マイマイジリ・カブラ崎・亀ヶ首など、即物的な沿岸地名も、音戸瀬戸が古くから瀬戸内海航路の要衝であったことを物語っている。音戸瀬戸を通過する航路は、デコボコ・ギザギザの海岸線、複雑な潮流、岩礁、浅瀬など、危険に満ちた難所であった。海岸地形や潮流の特徴についての知識がなければ練達の船乗りでも通過することは困難であった。誰にでもわかる即物的沿岸地名群は、船乗りたちの危険回避のための航路標識であった。それは尾道水道・瀬戸田水道周辺の地名群と共通し、やはり音戸瀬戸がふるくから海峡であったことを示している。

地質学・自然地理学からの検討 自然地理学の方法によって清盛開削の真偽を検証した。人工的開削を施したと仮定したなら、必ず海岸地形の変化やそれに伴う潮流の変化等の痕跡が残るはずである。そこで 海底地形の経年変化、 海岸地形の経年変化、 潮流による

侵食、対象地域周辺の地質、過去の災害による変化、の5つの観点から分析した。分析の結果、海底に存在する花崗斑岩^{かこうはんがん}などの岩脈は非常に浸食されにくい性質を持っているために人力で開削するのは困難である。縄文時代の海水面は現在より数m高く、現在、海峡南北に存在する巨大な海釜^{かいふ}は、縄文時代の潮流の流速が現在よりはるかに大きかったことを示す。縄文時代以降、現在の海水面に安定化するまでの過程で、海水面の上下変動は幾度となく繰り返されたはずだが、音戸瀬戸が陸地化するほどの大規模な変動は検出されない。海底地形の経年変化と潮流との関係を検討すると、音戸瀬戸の海峡内部は堆積作用よりも浸食作用のほうが大きく、歴史時代（弥生時代以降）に堆積作用で陸地化したとは考えがたい。海峡を埋めるような大規模な土石流の痕跡はみあたらない。以上の点が明らかになった。

以上、地質学・自然地理学の方法によっても、音戸瀬戸が清盛が開削して海峡になったという徴^{ちようしゆ}証^{しやう}は認めがたく、縄文時代から清盛の時代にいたるまで一貫して狭小な海峡であったという結論ならざるをえない。それは、歴史学・歴史地理学・民俗学の方法による研究結果と一致する。

2) 清盛開削伝説の歴史的展開

江戸時代の清盛開削伝説の広がり 清盛開削伝説が戦国時代すでに存在していたことは、**厳島神社神官棚守房顕**^{たなもりふさあき}が天正8年(1580)に書いた**厳島神社略史**^{ふさあきおぼえがき}『**房顕覚書**』にみえる。江戸時代後期には、清盛の内海航路開発の功績を称え、悪評高かった清盛を再評価する風潮が儒学者の間で高まり、広島藩では清盛の瀬戸開削への感謝を庶民に説く儒学者が現れた(香川南浜^{かがわなんびん})。また寺社参詣の旅行ブームのなかで、音戸瀬戸は宮島参りの途中に立ち寄る名所となり、船頭など地元民は土産話に「日招き」「にらみ潮」伝説を旅行者に語った。旅行者は驚嘆したり不審がったりした。

江戸後期には清盛の「日招き」は音戸瀬戸の専売特許ではなく、上方(京・大坂)^{かみがた}で人気があった武者錦絵^{むしやにしきえ}などでは、むしろ兵庫港修築のとき「日の丸扇」で日招きする清盛の豪快な入道姿^{にゅうどう}が、沈む太陽、厳島神社とセットで描かれている。一方、中国山地の田植え歌には、清盛が音戸瀬戸を日招きして開削したという歌詞がある。江戸後期、清盛日招き伝説は呉地域限定のローカルな伝説ではなく、京大坂から中国山地に到るまで広く浸透していた。

警固屋地区や音戸地区の地名起源説話は、上記の旅行ブームのなかで、メジャーな清盛伝説にあやかって、文化人や地元住民が語呂合わせによって創作したものであり、それによって地元住民の間には、英雄清盛を身近に感じ清盛伝説をお国自慢する郷土意識が芽生えていった。

近代小学校教育と清盛伝説 明治以降、小学校では郷土が生み出した英雄豪傑を称える郷土学習が行われ、立身出世・忠君愛国教育に利用されたが、呉地域、とくに警固屋・音戸地区では、豪快な清盛伝説が絶好も教材となった。清盛伝説・地名起源説話は、小学校の先生から子どもたちに伝えられ、地域住民の間に根付いていった。アンケートで70歳以上の高齢者の多くも小学校の先生に教わったと答えているのは、そのことを示している。先生たちは新たな創作も加えていった。たとえば警固屋地区の的場、昭和16年に住居表示地名になるまでは地名ではなかった。それが現在では平氏の射撃練習場があったからの

場という、と伝えられている。しかし清盛伝説が講談や立川文庫などの大衆文芸の人気題材にならなかったこと、軍人など新たな英雄の登場、音戸瀬戸が主要航路から外れていったことなどによって、清盛伝説は全国メジャーの地位から転落した。

現代に蘇る清盛伝説 戦後の地域社会・家族関係の変貌と大衆文化・子供文化の激変のなかで、地域の伝説と子どもたちとの接点は失われ、伝説は風化し、小さな地名起源説話は忘れ去られていった。しかし近年、清盛伝説をもとに、警固屋中学ではスーパー神楽「日招き」が創作され、音戸中学では和太鼓劇「清盛太鼓」が創作され、地域文化の新たな創造が試みられている。ここで問題になるのが、文化創造と歴史事実をどう折り合わせるか、である。清盛開削は事実ではなかったが、だからといって落胆する必要はない。サンタクロースは実在しないが子どもたちにとっては永遠のヒーローである。清盛伝説そのものは地域の歴史とともに歩んできた。鍵はここにある。そのためにも本研究が明らかにしたことを、地域社会の新たな文化創造に生かしてくれることを希望する。

今後の課題 清盛開削伝説・日招き伝説の成立 「日招き」伝説も「にらみ潮」伝説も、起源は実は中国にある。紀元前2世紀に書かれた『淮南子』に隣り合わせに出ている説話である。すなわち「日招き」伝説のもとになったのは、春秋戦国時代、魯陽公という武将が鉞で日を招き返して戦闘に勝利したという話で、これは宮島の管弦祭で舞われる蘭陵王の舞の由来伝説に発展していった。『淮南子』の魯陽公の日招きの話の前には、周武王が激流を睨んで鎮めて渡り殷紂王を滅ぼした話があり、これは「にらみ潮」伝説とそっくりである。『淮南子』は平安貴族たちに愛読され、日招きもにらみ潮も、平安貴族たちには共通の教養でありギャグであった。一方、田植え歌の日招きの歌詞も古く、それは日を招いて田植えをしたバチが当たって死んだ(没落した)「朝日長者」伝説とペアの関係にあった。これら系譜を異にする『淮南子』日招き伝説と「朝日長者」日招き伝説(田植え歌)が、どのようにして清盛日招き瀬戸開削伝説に変貌し統合されたのかは、今後の課題であるが、治承4年(1180)、高倉上皇が厳島参詣したときの清盛の絢爛豪華な演出が伝説のもとをつくり、平氏滅亡後の厳島神社が信仰拡大のために伝説を創作し、厳島信仰とともに広まっていき、田植え歌の主役が朝日長者から清盛に入れ替わったに違いない。

3) 清盛伝説認知度に関する実態調査

清盛伝説がどの程度認知されているか、地元の警固屋地区・音戸地区を中心に呉市全域、広島市とその近辺、東広島市(広島大学学生=全国)でアンケートを実施してみた。アンケート調査にあたっては呉市域の小中高校、各地区の公民館、呉市政策推進課に協力していただいた。データの解析はまだ途中であるが、呉市域住民の大多数は年齢に関わらず清盛開削伝説を知っており、聞いたのは小中学校の教師から、ついで父母祖父母からが多かった。若年層ほど、父母祖父母より小中学校の先生からのほうが多くなる。近年、警固屋地区・音戸地区の小中学校では総合的学習で教材として取り上げられ、調べ学習のなかで学ぶようである。清盛伝説の個々の説話では、「日招き」の認知度は高いが、あとはあまり知られていない。警固屋地区・音戸地区から一歩出ると、呉市域住民でも清盛開削と「日招き」しか知らず、呉市から出ると、清盛開削伝説の認知度は急激に低下する。今日、清盛開削伝説は呉市域に限定されたローカルな伝説であることがわかった。それは江戸時代の清盛伝説の広がり比べて、大きく収縮しているといえる。呉市民の多くは、清盛の音戸瀬戸開削を事実と信じており、清盛伝説を誇りに思っている。

とくに地名起源説話は地元でも、現行地名(警固屋・鍋・的場)の認知度は比較的高いが、旧字あざなに関わる地名起源説話はほとんど知られていない。現行地名である警固屋・鍋

の認知度のに比べて「舞々尻^{まいまいじり}」の認知度が低いのは意外だった。他の小地名の起源説話はほとんど知られていなかった。2つある警固屋の地名起源説話のうちでは「警固番所説^{ばんしょ}」の認知度が高く、「炊き出し小屋説」があまり知られていないこと、音戸地区の地名起源説話の認知度が警固屋地区より低いことも注目される。アンケートに例示した伝説・地名起源説を読んで関心を示す人は多く、また清盛開削が事実でないとしたらなぜ開削伝説があるのか真相を知りたいという人も多かった。

以上まだまだ粗雑なデータ分析しかできていないが、1) 清盛開削と「日招き」に伝説認知が限定されていること、2) 地元でも現行地名の起源説話しか知られていないことは、地域文化としての伝説継承にとって、さまざまな問題を提起している。認知内容の貧弱化は、一つには伝説と生活との接点が失われ、たんなるお国自慢に単純化されてしまった結果であるかもしれない。この分析結果をふまえて、幼児教育から、小中学校での地域学習、高校の日本史学習、社会人・高齢者を対象とする公民館活動まで一貫させた、清盛伝説を素材とする教材を開発することが次の課題となる。

4) 研究成果の発表

研究代表者下向井は、担当部分の研究成果の一部を呉市の公開講座などで講演した。9月10日(土)呉郷土史講座(呉市中央図書館) / 11月5日(土)広島日本史の会(広島県生涯学習センター) / 11月8日(火)高齢者健康福祉大学校(広島県高齢者健康福祉センター) / 11月21日(月)呉市立鍋小学校PTA講演会 / 1月8日(日)呉オープンカレッジ公開研究会(警固屋公民館)。また1月8日(日)には、研究メンバーによる中間発表会も行った。本研究の研究成果の全体を、芸備地方史研究会の会誌『芸備地方史研究』に「特集号」のかたちで公表させてもらうことを検討中である。

3, 行政の施策への反映

本研究の成果は、呉市の学校教育と文化行政に、以下のような貢献が可能である。

1) アンケート解析結果によってこれまでの小中学校での実践の成果と課題を明確化し、これまでの実践の成果をふまえながら本研究の研究成果によって新たな地域学習教材を開発し、実践する。本研究では授業案作成まではできなかったが、次年度以降も助成が受けられるなら、本研究をふまえて、警固屋地区・音戸地区の小中学校の先生、宮原高校の先生に加わっていただいて、地域の実情に即した教材開発を行いたい。

2) 本研究で収集した伝説を、読み聞かせ用教材、小学校地域学習の副教材として編集し、「音戸瀬戸開削伝説集(解説付き)」(仮題)として刊行することが出来る。教師や読み聞かせ担当者に、伝説の意味、伝説と歴史事実との関係、伝説を伝承することの意味について深く考えて貰うための詳しい解説を付ける。

3) 公民館活動の一環として「伝説集読み聞かせ」のための成人勉強会を立ち上げ、勉強会をふまえて幼稚園児・小学校低学年児童に「読み聞かせ活動」を行い、地域の高齢者と子どもたちとの絆を深める。

4) 本研究の研究成果をふまえ、公民館か入船山記念館か大和ミュージアムで「清盛・音戸瀬戸・日招き」展(仮題)を開催し、展示終了後、展示資料を警固屋公民館か音戸公民館で常設展示する。